柳亭種彦撰
國政畫
五十四ノ扇
八犬傳
犬のさうし

八犬傳
犬のさうし

人魚迺草紙

芳幸板

壹

重畳けれど又山海經南山の部ゆ青岳之山英水焉より出て即翼の流に注ぐ其中赤鱬多し其狀魚の如くして人の面に其音鴛鴦の如し食へば疥を除く其餘人魚の事同書ゆ六所あり此人魚と云るの書ゆ人くる原始なる海し本草ゆも人魚いれど喰て長壽を保つと漢籍にあり若狭の八百尾の故事い若耶群談ゆも載られど膏の功能い恐くは曲亭翁の新設なるべん妙椿の八百尾くるい本編の眼目なれど決めてさるべる有べき人魚の彼にあるべて此ゆ出些妖狸に関係わるも亦作者の深意なるべあど愚輩の窺知るべからゆ非ざ

那伽之郷　龍髯叟

安西就久 景重

麻呂
再太郎
信重

水家
實母散
中橋蘭傳馬町一丁目東ゴバ
集堂孝輔製

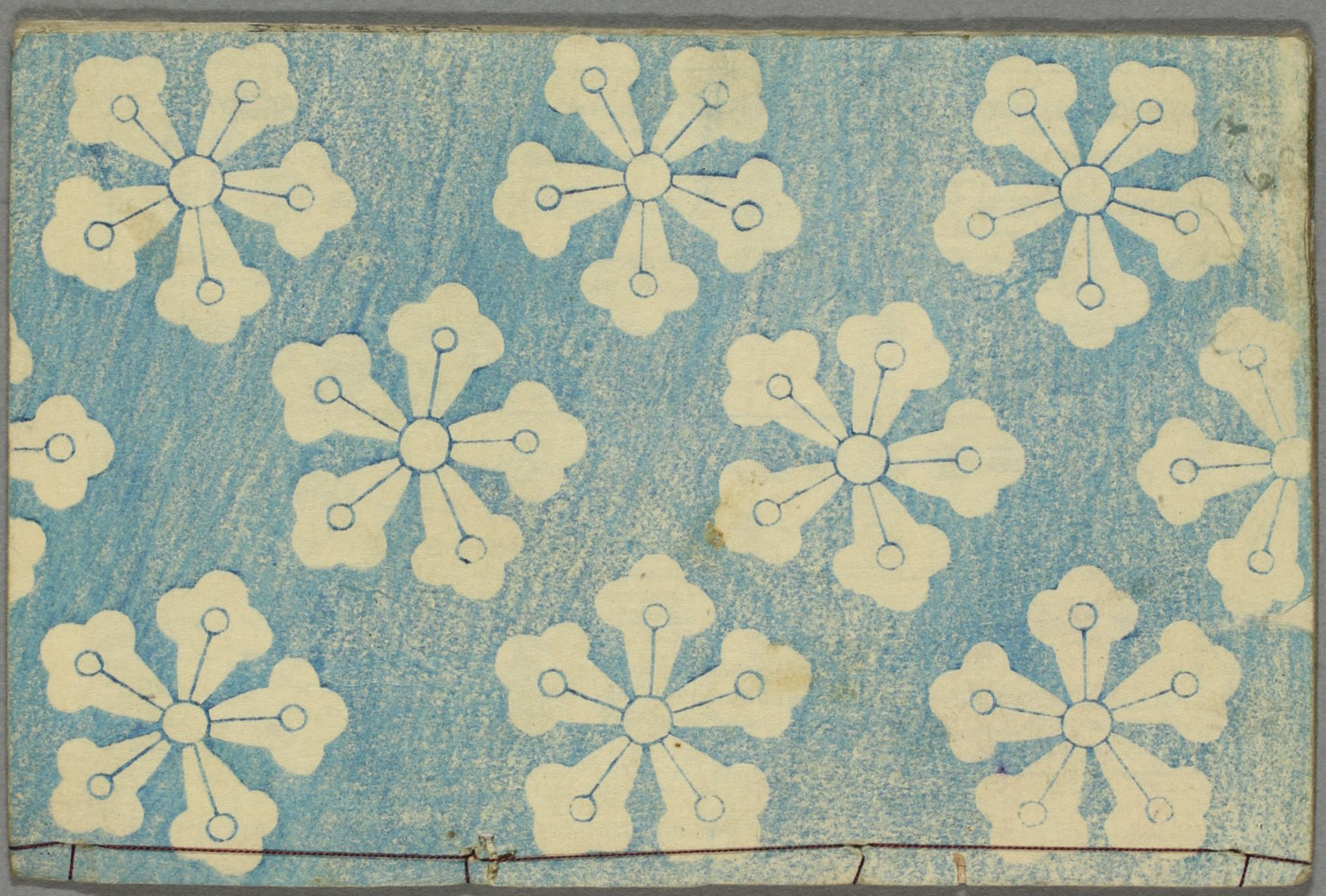
柳蔭月朝妻

四編より 山々亭有人作
九編迄 梅朝樓國貞画

藪黄鶯八幡不知

山々亭有人作
錦朝樓芳虎画

當春賣出し所の柳蔭月の朝妻殊の外御機嫌る恊ひ製本手廻らざる迄
賣捌ル既外聞旁難有仕合奉存ル夫ゾ御樣ゑ當年彼時類禅門諸國を經歷花ゑ言葉を
鐘ゑ測の深く貴ゑ八幡の藪の奥を探り
念と入初編ゑ六七編迄無相違出版仕ル是ゑ偏ゑ



柳亭種彦譔
國政畫
五十四扇

文政元年二月

神奈川屏風

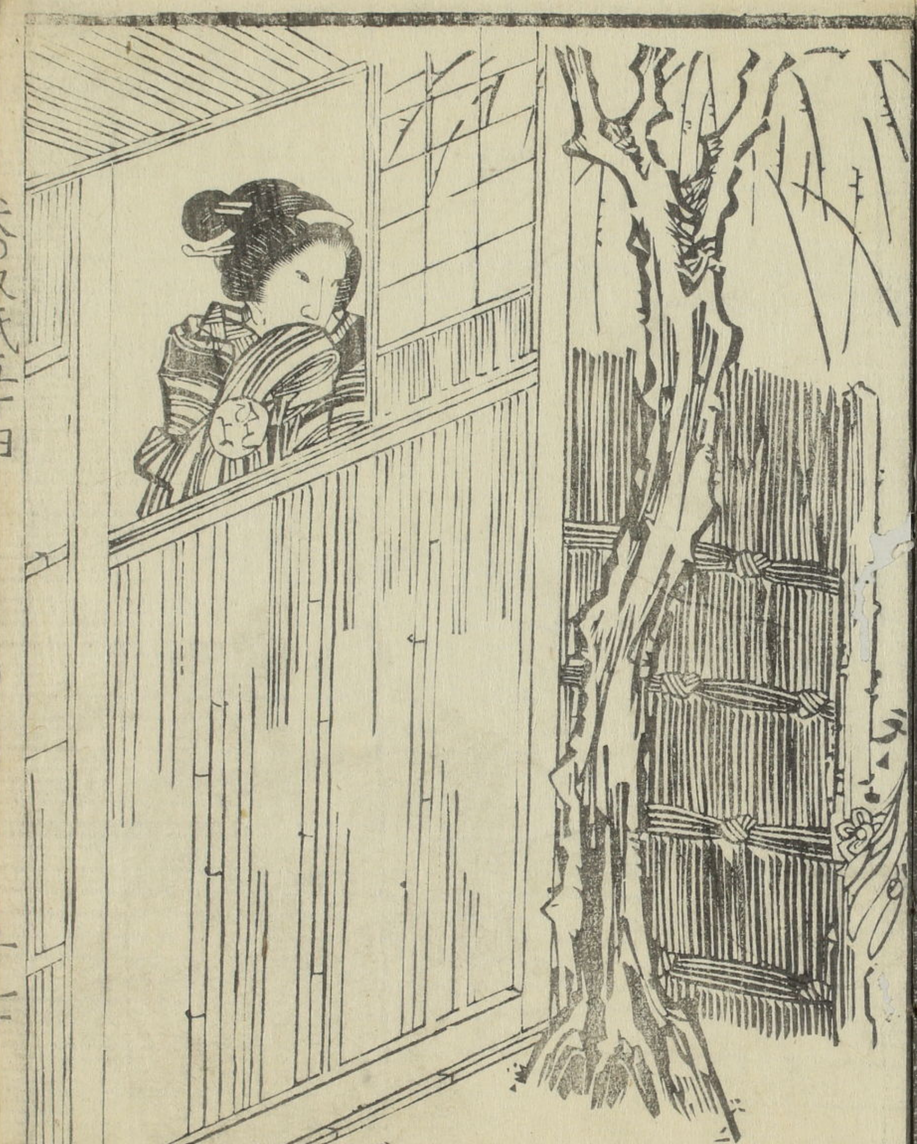
北地ちさうし

下のまき

つくきそう板

牛

牛



ふるふる
復

つゞき　めうけんじゆとゆーこうらのさく
のあたりのさきとの
さきゆくさきとの
さきゆくさきとの
らくいとひ
めうけんじゆとゆ
ぜんあとさきとゆ
ゆーこうらのさく
やぶやくべし
さいたくくのめう
けんじゆのくくの
そこのらさうを
きこえてこと
うーこと人やきべ
さいたくくあやだた
あきてらさうを
きるふらさのの
つるをかん
ようやきて
きくこうのかやるし
ごくくのかやるし
らさうしあるし
ちくくらあるしあ
きうしあてろ
はあるんーうう
きのびりくくんと
ちくびくくあどふ
あるひもうけぜ

ぜうどさてうのせうる
あうりうくふ
又ちくくかうち
あてくらふてくう
ちあーるぎせー
そんーしんい
けあうりのあうくあ
くくえねうりね
うりはあけのはあ
くちあんあもあ
やくきけべくくあ
くうるようーうの
つあーとくくのくく
又ちくくあのあく人
ちくうのようけくけ
くえはくさのくくあ
くうりあくくうあさ
かあーしどうの
くあくの大川太田
ふくくのうんせん
あくくくくうあん
ぎあうのせくるる
ふひくさくふはく
あくせるうくふ
ちくくはくくあり
ふくうりくあけくを
くくあうりーくき
あくうあくあひうの
ひのくあひけくくあ

明治四年辛未陽春開板標目

厚化粧萬年嶋田 八編 十九編 春水作 國貞画
新局九尾傳 十二編 十三編 十四編 春水作 國貞画
室町源氏胡蝶卷 十九編 二十編 二十一編 二十二編 種彦作 國貞画
筆海四國聞書 十三編 十四編 種彦作 國貞画
鼠祠通夜譚 八編 九編 種彦作 國貞画
明鴉黒白画福禍 十六編 十七編 種彦作 國貞画
童謡妙々車 廿四編 廿五編 種彦作 國貞画
花封荅玉章 十編 種彦作 大尾 國貞画
薄倖幼日記 二十編 二十一編 春水作 國貞画
八犬傳犬の双紙 五十四編 五十五編 柳亭作 國貞画
十偽ぎ葛飾譚 十一編 十二編 種彦作 國貞画

南傳馬町壹丁目 蔦屋吉藏板

以五和尊
内
門十九冊
四十三冊有